# *Troilus and Criseyde* における喜劇的要素

佐々木　冨美雄
外国語教室
（1991年８月29日受理）

# Comic Elements in *Troilus and Criseyde*

Fumio SASAKI
*Department of Foreign Languages*
(Received August 29, 1991)

*Troilus and Criseyde* is one of the most serious poems of Geoffrey Chaucer (1340?-1400). Traditionally *Troilus and Criseyde* has been regarded as the tragic poem. In this paper I have tried to explore into the reasons why *Troilus and Criseyde* arouses the deep pleasure of his readers (or his audience) for many centuries that has passed since his death. There would be many reasons, but one of the most remarkable reasons would be *comic vision* that we can participate in, and his comic elements must be adequately appreciated in this poem.

〔I〕

Geoffrey Chaucer がロンドン港の税関長として勤務していた間にさらに1382年４月には小税関長にも任命された。1386年11月までその職につき，この間にあって，1377年～78年にかけて海外出張をしている。1372年の第１回目のイタリア派遣に続き，これが第２回目イタリア旅行となる。前回はジェノア及びフローレンスに行ったのに対し，この回はミラノに赴くとある。1385年，税関長に永久的代行をおくことが許可になっている。[1]

これはどういうことを意味するかと言えば，*Troilus and Criseyde* が大体1385年前後に書かれているということである。代行などにより時間的余裕が出来たということであろう。長年胸中に暖めて来ていた人間とは何か，愛とは何かという極めて近代的な問題がここに至って明確になされているからである。この1385年というのは *Troilus and Criseyde* の Book Ⅲ L.624～L.630に出ている天体 Jupiter と Saturn の合（conjunction）の現象より推察されることでその前後ということである。しかし，これと同時に Boethius の *De Consolatione Philosophiae* の訳の問題がある。これはやはり大体1380年頃と考えられる。Chaucer はこの時期 word by word に Boethius を訳していたことが知られている。勿論ラテン語ばかりでなくフランス語の訳も使っていたでありましょう。Boethius 自身もこの小論で問題にする悲劇的な人間である。かねてから Chaucer 自身の問題でもあった人生のあらゆる事柄，富，名誉，名声，幸福，権力，自由意志，また特に愛とか摂理，神誓の解答がぎっしりと並べられていたのである。此れらの問題に悩んでいた Chaucer には全くこれ以上にない本が出現したことになる。[2]

Chaucer の作品群の中に Boethius の影響を色濃く反映しているのはこの *Troilus and Criseyde* の外に *The Canterbury Tales* の *The Knight's Tale* があるが，この *The Canterbury Tales* にはその影響は散見されるだけで *Troilus and Criseyde* の程ではない。こうした心的状態にあった時に彼の心を感動させたものに Boccacio (1313－75) の *Il philostrato* があった。とにもかくにもこの作品中に登場するトロイロ，クリセイダ，パンダロの三主要人物の織りなす，生々しい人間的な愛欲の世界に一喜一憂するほどに，Chaucer はわがものとしたであろうことが知れる。しかしこれ程感動したにもかかわらず *Troilus and Criseyde* の作品中には Boccacio の名前は出て来ない。「ロリウス」(Lollius) とよばれる著者の書いているごとく」という名を上げているところを見ると，彼は Boccacio ではなくロリウスをイタリアの詩人と考えていたのかも知れない。*Il philostrato* を己れの流儀で書き改めようとした Chaucer は余りにも Boethius に心酔しすぎていた。いわゆる Chaucer がいう "Tragedy" の8239行の *Troilus and Criseyde* が出来上るわけである。それは次のスタンザから始まる。

The double sorwe of Troilus to tellen,
That was the kyng Priamus sone of Troye,

In lovynge, how his aventures fellen
Fro wo to wele, and after out of joie,
My purpose is, er that I parte fro ye.
Thesiphone, thow help me for tendite
Thise woful vers, that wepen as I write.
(Book I : L.1-7)[3]

こうして始められる物語はまさしく“tragedy”であった。ここで問題にする“tragedy”とはギリシア悲劇のような高邁な定義ではない。彼が訳した *De Consolatione Philosophiae* の中にある例を見よう。

What other thyng by waylen the cryinges of tragedyes
but oonly the dedes of Fortune, that with unwar strook
overturneth the realmes of greet nobleye?
(Gloss. Tragedye is to seyn a dite of a prosperite for a tyme, that endeth in wrecchidnesse.)[4]

つまり人間の運命の逆転劇である。“prosperite”にあったものが最後には“wrecchidnesse”に終わるということである。こうしたBoethiusの定義を前提として書き始めた。いや“tragedy”を越えて冒頭は復讐の女神の1人Thesiphoneに援助を求めた叙事詩の真面目な祈願でもある。この出発はなんとBoethiusの *De Consolatione Philosophiae* に似ていることだろうか。

Allas! I wepynge, am constreyned to bygynnen vers
of sorwful matere, that whilom in floryssch-
yng stydie made delitable ditees.
“Carmina qui quondam studio florente poregi.”
—Metrum I
(Boece:L.1-3)[5]

「泣きながら」(wepynge) は convention の一つであるがここにある“sorwful matere”が気にかかる。悲しい素材を扱って泣きながら書くことが悲劇につながった。この流れは The Canterbury Tales の中に出ている。

Tragedie is to seyn a certeyn storie,
Of hym that stood in greet prosperitee
And is fallen out of heigh degree
Into myserie, and endeth wrecchedly.
And they ben versified communely
Of six feet which men clepen exametron.
(*The Canterbury Tales*:VII
*The Monk's Tale* L.1973-1978)

こうしたBoethiusの影響にあったChaucerはもともとその基調として人間の悲しさ，盲目さなど一段上から眺めていた彼は何としてでも“comedy”を書きたかったのだ。それは未完ではあるが *The Canterbury Tales* へと連結されて行くものである。それを書こうと願っている。

Go, litel bok, go, litel myn tragedye,
Ther God thi makere yet, er that he dye,
So sende myght to make in some comedye!
But litel book, no makyng thow n'envie,
But subgit be to alle poesye;
And kis the steppes, where as thow seest pace
Virgile, Ovide, Omer, Lucan, and Stace.
(Book V:L.1786-92)[6]

1788行の“comedy”こそこうしたBoethiusなどを胸中にしながら*The Canterbury Tales*という順序になる。ここでは彼のかいた*Troilus and Criseyde*が余程自信があったのであろうか，自分の作品もVirgil, Ovid, Homer, Lucan, Statiusの仲間に入れてくれるよう懇願している。ここでChaucerの*Troilus and Criseyde*はChaucerがこれ程まで願ったように“tragedy”なのであろうか。次の大作の*The Canterbury Tales*まで喜劇的なものは待たねばならなかったであろうか。

〔II〕

Chaucerは完全に *Il philosrato* の書替えをしている時に確かに“tragedy”を書いているのだということは承知していた。前にも述べた如くアリストテレス的なBoethiusを通した悲劇の定義をも良く知っていた。願わくは喜劇を“er that he dye”に書かしめ給えと願うのである。しかしBoccacioと異る所はこれらの悲劇の定義を適切に例証したこと，つまり，TroilusとCriseydeの幸せと彼女の叔父として登場するPandarusをうまく説明し，そしてすべての人々の悲しみを置き替えたことではない。*Troilus and Criseyde* の基調は良く見てみるとcomedyであるということだ。では何が彼をして“tragedy”といわしめているのか。それはBoethiusもさることながらChaucerの人間世界に対する洞察力の深さによったのではないかと考えられる。それはとりも直さず人間の盲目性に対する洞察であろう。もっと言

えばこの世俗の世界における人と人の関わりの如何に怪奇なこと，要約すれば未知なる世界と既知なる世界，有限と無限の世界，無時間的世界と限定された世界とに対する洞察であった。“mutability”と“immutability”の世界かも知れない。Chaucerのこれらの考えは*Troilus and Criseyde*の物語そのものに出ている。それはFortuneの神を借用した姿である。Chaucerにまで至るとAnglo-Saxon的な“Wyrd”の世界ではなくなっている。もっと近代化された明るいFortunaなのである。*The Seafarer*や*Beowulf*に流れているFateとかDestinyを裏に持つ“Wyrd”ではない。例えば実際に*Troilus and Criseyd*を見てみると次のようになる。[7]

五巻からなるこの詩は正しく一つ一つを見て行くと図式化された運命の女神によって左右される物語そのものであるということだ。第一巻においては恋の悩みからだけは少くなくとも免疫だと思っている。それがCriseydeを恋するや悲しみ（The double sorwe of Troilus …を思い出すべきだ）のどん底に陥いるのである。少くなくともこの時点ではTroilusは無傷のまま過ぎさることが出来ると自信を持っていた。つまり偽りの幸福に浸っていたことになる。Fortunaはかくして最も代表的な英雄を舞台にのせ，輪の最低の位置につけ動き出すこととなる。第二巻にいたって冒頭にも述べられている如く輪は動き始める。

Owt of thise blake wawes for to saylle,
O wynd, o wynd, the weder gynneth clere;
For in this see the boot hath swych travaylle,
Of my connyng, that unneth I it steere.
This see clepe I the tempestous matere
Of disepeir that Troilus was inne;
But now of hope the kalendes bygynne.
(Book Ⅱ:L.1-7)

絶望の中にあるTroilusを救い出すようにという祈願から始まる第二巻は，いわゆるPandarusが彼の友TroilusのためにCriseydeを獲得してやろうと動き始めたことによりその時からFortunaの輪は上昇に転ずることになる。Criseydeを得ることは喜びの入手であり，Boethius流に言えば例の“prosperite”の獲得であり，この美酒はこの地上の果敢ない夢の取得である。第三巻に至りついにFortunaは己れの大切な主人公を輪の最高位につける。第4巻の冒頭では次のスタンザで始まる。

O blisful light, of which the bemes clere
Adorneth al the thridde heven faire!
O sonnes lief, O Joves doughter deere,
Plesance of love, O goodly debonaire,
In gentil hertes ay redy to repaire!
O veray cause of heele and of gladnesse,
Iheryed by thy myght and thi goodnesse!
(Book Ⅲ:L.1-7)

そして「この世の中で生きとし生きるもの愛を知らぬものは価値がなく，長くは生き長らえることはないのだ」と続いている。大変な力の入れようである。しかしこの第三巻の幻想はこの世俗の愛は不滅だとするのは錯覚だということなのだが，これもFortunaのなせる技である。錯覚のなせる喜びと法悦の世界へと導かれる。やがて第四巻において運命の輪は廻り始める。

But al to litel, weylaway the whyle,
Lasteth swich joie, ythonked be Fortune,
That semeth trewest whan she wol bygyle,
And kan to fooles so hire song entune,
That she hem and blent, traitour comune!
And whan a wight is from hire whiel ythrowe,
Than laugeth she, and maketh hym the mowe.

From Troilus she gan hire brighte face
Awey to writhe, and tok of hym non heede,
But caste hym clene out of lady grace,
And on hire whiel she sette up Diomede;
For which right now myn herte gynneth blede,
And now my penne, allas! with which I write,
Quaketh for drede of that I moste endite.
(Book Ⅳ:L.1-14)

Fortunaの輪から投げ出された哀れなTroilus。運命の女神は高みにいたTroilusを投げ出すや打ち笑いつつ，嘲りの顔を見せる。運命の気紛れか，今度はDiomedeを乗せて輪は廻るのである。喜びと法悦は如何に果敢ないものであるかがこの二つのスタンザに盛りこまれている。しかもこの四巻では今までのすべてのことがこうなる運命であった事が立証されているのだ。第五巻においてTroilusは運命の輪から投げだされつまり“Prosperitee”から“wrechidness”へと下ることになる。これはBoethiusの「悲劇」である。やがて中世の全般的な物語の如く死で終わる。第五巻の第二スタンザは次のようだ。

The gold-ytressed Phebus heigh on-lofte

Thries hadde alle with his bemes clene
The snowes molte, and Zepherus as ofte
Ibrought ayeyn the tendre leves grene,
Syn that the sone of Ecuba the queene
Bigan to love hire first for whom his sorwe
Was al, that she departe sholde a-morwe
(Book V:L.8-14)

そしてこの *Troilus and Criseyde* の "narrator" は Troilus に告げるのだ。

This Troilus, withouten reed or loore,
As man that hath his joies ek forlore.
Was waytyng on his lady evere more
As she that was the sothfast crop and more
Of al his lust or joies herebifore.
But Troilus, now far-wel al thi joie,
For shaltow nevere sen hire eft in Troie!
(Book V:L.22-28)

本当に Troilus にとって "now far-wel al thi joie" なのである。Corsa もいう言く Boethius の "I torne the whirlynge wheel with the turnynge secle; I am glad to chaungen the loweste to the heyeste, and the heyeste to the loweste" (*De Consolatione Philosophiae*:Book II, Prosa 2,51ff.) が耳に響くのである。[8] やがて Criseyde に裏切られた Troilus は終末を迎えることになるのだが，待っているのは戦場に出て自らの死を持つことだけであった。裏切りと死に対しては次の言葉で証明されている。

And fro this world, almyghty God I preye
Delivere hire soon! I kan namore seye"
(Book V:L.1742-43)

ここで終ってよかったのである。しかし Chaucer はここより急に，何かを付け加えたくなったのである。魂をこのままに捨てて置くわけにはゆかなかった。アリストテレス的に第八天へと昇天させるのである。[9]

And whan that he was slayn in this mannere,
His lighte goost ful blisfully is went
Up to the holughnesse of the eighthe spere,
In convers letyng everich element;
And ther he saugh, with ful avysement,
The erratik sterres, herkenyng armonye
With sownes ful of hevenyssh melodie.
(Book V:L.1807-13)

やがて昇天した Troilus は「海に囲まれた小さき地上の一点を凝視し，このあわれな世界を心から軽蔑し，この天界における至福に比べてすべてが空である」ことを悟るとある。急に Chaucer はキリスト教的になり，Boethius 的哲学者になるわけである。そして第八天の Troilus はこの「小さき海に囲まれた地上」で彼の死を嘆き悲しんでいるのを見て呵呵大笑するのである。

And in hymself he lough right at the wo
Of hem that wepten for his deth so faste;
And dampned al oure werk that foloweth so
The blynde lust, the which that may nat laste,
And sholden al oure herte on heven caste.
(Book V:L.1820-25)

さて前にも引用した (Book V:L.1786-92) 如く，Boethius 的な "tragedy" の定義を踏まえて，何が何んでも "tragedy" を書こうとしていたことだけでは確かである。しかし本当に悲劇的とだけで片づけられる問題であろうか。

〔III〕

この *Troilus and Criseyde* において Chaucer は悲劇と哲学的な意味合いを持たせようと如何に努力したかは Fortuna を中心にして考えると明確に見てとれる。しかし Chaucer のあらゆる作品にある最基底部のものは "humorous" な感覚ではなかろうか。これが継続的に Chaucer を楽しませている力だと思われる。[10] *Troilus and Criseyda* の第一巻，第一スタンザの "The double sorwe of Troilus to tellen,／…" でさえすらも最初から述べた如く曖昧性，従ってこの物語に対する疑義が浮かび上って来る。つまりはこの物語の面白さである[11]。よく見ているとこの *Troilus and Criseyde* に登場してくる *Troilus and Criseyde* における登場人物，Troilus も Criseyde も Pandarus も "comic" な要素を持っている。悲劇を Chaucer は意図するがこの三人の中でも特に Pandarus などは登場した喜劇的な滑稽味のある人間として出て来る。

By wayling in his chambre thus allone,
A frend of his, that called was Pandare,
Come oones in unwar, and herde hym groone,
And say his frend in swich destresse and care.
"Allas," quod he, "who causeth al this fare?

O mercy, God! what unhap may this meene?
Han now thus soone Grekes maad yow leene?
(Book I :L.547-53)

これを舞台で見たら本当に滑稽味の溢れた場面であろう。以下 Troilus と Pandarus のやりとりがあり，遂に“悩み”の原因を語るはめになる。Troilus が Criseyde の名前を告白するまで延々と300余行も続く。ここで *Troilus and Criseyde* で始めて使われる“game”が出てくる。Troilus はとうとう Criseyde の名前を Pandarus に打ち明ける。

And with that word he gan hym for to shake,
And seyde, “Thef, thow shalt hyre name telle,”
But tho gan sely Troilus for to quake
As though men sholde han hym into helle,
And seyde, “Allas! of al my wo the welle,
Thanne is my swete fo called Criseyde!”
And wel neigh with the world for feere he deide.
(Book I :L.869-875)

「名前を聞くやいなやパンダルスは，なんと喜こんだ」(Book I :L.876-7) ことは，女の名前は姪の名前であったのだ。Book Ⅲの1247行以下のようにして逢引が叶い，喜こびの言葉，それに対して，1422行からの Criseyde の Troilus に対する言葉，これ等は格調が高いにもかかわらず，その基調において“comical”なものを持っていることだ。やがて Fortuna の輪は廻るわけである。いわゆるここでいう悲劇の定義の如く「高位にあった」(in greet prosperitee) にあり栄えていた者が高みから悲劇のどん底に落ち込む (Into myserie, and endeth wrecchedly) のである。運命のなせる技としかいいようがない。*Monk's Tale* の中における Samson や Hercules の話しの場合と同じくここで注意したいのは“lemman” (Lover) を通して没落がなされていることではなかろうか。それは他の中世の物語の英雄のように最後にはこの「英雄」(Troilus) は戦場へと走り去り自殺的行為ともいうべき死を求め，絶望 (despair) のうちに死に至るということである。*Troilus and Criseyde* における三人三様の姿が描かれているわけであるが，余りにもその姿はその面白さという観点から立つと悲劇というよりむしろ喜劇的な面を見た方がいいのではないかということである。しかし Chaucer は途中から計画通り Troilus を絶望の中に死なせることをしなかった。余りにも悲しいことになった Troilus に対していった言葉で終ってよかった。

And fro this world, almyghty God I preye
Delivere hire soon! I kan namoore seye.”
(Book V :L,1742-3)

しかし Chaucer は自分なりの解決法を見出した。Troilus を「英雄」として，また名誉ある戦士として死なせたのである。

In many cruel bataille, out of drede,
Of Troilus, this ilke noble knyght,
As men may in thise olde bokes rede,
Was seen his knyghthod and his grete myght.
And dredeles, his ire, day and nyght,
Ful cruwely the Grekis ay aboughte;
And alwey noost this Diomede he soughte.

And ofte tyme, I fynde that they mette
With blody strokes and with wordes grete,
Assayinge how hire speres weren whette;
And, God it woot, with many a cruel hete
Gan Troilus upon his helm to bete!
But natheles, Fortune it naught ne wolde,
Of oothers hond that eyther deyen sholde.
(Book V :L.1751-63)

ここで敢えてこの「英雄」(Troilus) に関して言えば前述の如く Troilus に特別であったわけではないわけである。栄華 (prosperity) にも悲歎 (misery) にも遭遇し，運命の神 (Fortuna) の気まぐれをも経験するということは何もこの「英雄」(Troilus) に特別なことであったわけではない。Troilus は普通の恋人として世の移り気を経験したことになる。[12] つまり Chaucer はこのエロッテックな内容に確かに Troy 戦争という切迫した情況を背景に悲劇の形態と構造とを与えていることは確かだ。なる程 Troilus と Criseyde の結末は悲劇にふさわしい高みにまで到達していることも確かである。しかし悪く言えば Criseyde の一人三役の姿，ギリシヤの予言者の娘である彼女は Steadman の言葉を借りるなら“lover”であり“bawd”であり“mistress”の役である。恋人であり，娼婦であり，愛人である素材は中世には多くあった。もっと上品な人物として登場して来ることは事実であるが－。[13] つまり差し迫ったTroyの運命を背景に恋人達の喜びと苦悩を並べる際に，悲劇的なテーマと認識されているものと，もう一つ騎士道的ロマンスの英雄的価値とを，より低俗な喜劇とを共存並列させたことであろう。古典ないし中世の文学にあっては「愛」(amor) は最後には狂気または死に至るプロセスとし

て教訓に提示され，叙情詩にあっては「愛」は英雄的行動への刺激となったり，特には阻止力となったりする。つまり栄光への追求または安易な不名誉な行動へと誘う原動力となる。従って戦いは常に悲劇的（また時には叙事詩）に，愛と結婚は喜劇（comedy）に振り分けられているが，それに登場してくる人物の社会層のレベルと本質的に相関関係があった。高貴な人物を描くにはいわゆる "high style" でという理論が確立する。一般的愛の問題を描くにあたっては登場人物の素質のこととして作者にまかされていた。[14]

悲劇的（tragic）にするのか喜劇的（comic）にするかは明確にされていなかった。作者の判断の問題である。Chaucer の *Troilus and Criseyde* は一概にどのジャンルに属するかを決め兼ねる作品である。"*Epic tragedy*" かも知れない。"*Elegy*" かも知れぬし，"*Encomium*" かも知れない。中世の文芸のパターン "*love*" − "*valor*" − "*ruin*" の図式上の線にのっていることは確かだ。しかし Troilus は単なる死へと直行したのではない。"Tragedy" の図式にはないものを Chaucer は描いた。彼は最後の最後まで「貴人」として，「戦士」として人生を謳歌している。死して後第八天（Book V:L.1807-13）に昇天する。そして「海に囲まれた小さき地上の一点を凝視し」（Book V:L.1814-15）己れの死を悲しんでいる人々を呵呵大笑（Book V:L.1821-22）するのは悲劇的要素を薄め喜劇的でさえすらある。この *Troilus and Criseyde* の素晴しいことを否定するものではない。夢の中とはいいながら "narrator" が異常な誉れの館を描く場面をもつ *The House of Fame* また *The Parliament of Fowls* の中における "fowls" など，Chaucer は「愛」の問題を追求しつつ，その基底に "comic elements" があるのではないか。これが大きな要素として "*The Canterbury Tales*" につながって行くものと思われる。Fortuna を中心に考え過ぎた傾向にあるが，Chaucer 己れの人生の諸問題を Boethius の衣につつみ，ベースに comic な要素を持たせつつ *Troilus and Criseyde* を提示したということになる。

## —Notes—

1) Nevill Coghill: *Geoffrey Chaucer* Longmans, Green & Co. 1962, p.6
2) *The Works of Geoffrey Chaucer*, edited by F. N.Robinson, 2nd edition (London: Oxford University Press, 1957) p.320
3) これからの *Troilus and Criseyde* の引用その他テキストは前掲の Robinson 版を使用した。随時 The Riverside *CHAUCER*, 3rd edition, General Editor Larry D.Benson を参照した。
4) Robinson: Op. cit. *Boece*, Book II Prosa2, L. 70-72 p.331
5) Robinson: Op. cit. *Boece*, Book I L.1-3 p.320
6) *The Complete Poetry and Prose of Geoffrey Chaucer* Edited by John H.Fisher, Holt, Rinehart and Winston 1977 p.538
7) Helen Storm Corsa: *CHAUCER* Poet of Mirth and Morality University of Notre Dame Press 1964 p.40ff.
8) H.Storm Corsa: Op. Cit.p.42
9) H.Storm Corsa: Op. Cit.p.42ff.
10) H.Storm Corsa: Op. Cit.Preface
11) T.W.Craik: *The Comic Tales of Chaucer* Methuen 1964 Preface Ida L.Gordon: *The Double Sorrow of Troilus* A study of Ambiguities in *Troilus and Criseyde* Oxford 1970 Introductory
12) John M.Steadman: *Disembodied Laughter Troilus and The Apotheosis Tradition* A Re-examination of Narrative and Thematic Context University of California Press 1972 p.88ff.
13) Ernest Robert Curtius: *Europeam Literature and The Latin Middle Ages* Translated by W.R. Trask Harper & Row 1963 p.417ff. Jest and Earnest in Medieval Literature
14) J.M.Steadman: Op. Cit. p.90 ff. なお "tragedy" の対照としてAlfred David: *Chaucerian Comedy and Criseyde* Chaucer Studies iii Essays on *Troilus and Criseyde* Edited by Mary Salu Rowman & Littlefield 1972 p.90ff. を参照した。